第16回シンポジウム　歴史教科書・いままでとこれから

「新科目「歴史総合」と近現代史学習の課題」参加記

足柄高校　**内山　博貴**

2021年10月17日(日)、歴史教育者協議会ら関係団体が主催する新科目「歴史総合」に向けたシンポジウムが実施された。

シンポジウムでは、はじめに歴史教育者協議会WGより「歴史総合」教科書の全体的特徴について報告がなされた。日本の近代化礼賛への危惧や「近代化」「大衆化」「グローバル化」といった概念への批判点などがみられた。最後の課題にもあった通り、我々教員が今まで以上に学習の幅を広げ、適切な知識の獲得が求められていることを感じた報告であった。

次に田中・中村報告である。ここでは日本史・世界史教員からみた「歴史総合」における、教科書記述の比較・検討がなされた。日本史教員から見た「歴史総合」として田中氏からは、従来の教科書から削られた部分に着目し特徴が分析された。明治維新における「国内矛盾」の欠落の多さなどが分析され、まとめとして「民衆が描かれていない」点や歴史と自己の乖離に繋がる危険性が指摘された。

中村氏からは、ドイツ史を中心とした検討がなされた。論点として「ドイツ統一」と「ナチスの台頭」が取り上げられ、研究史と教科書記述の比較・検討が行われた。構図・陣営の理解に終始するという点や合理化・大衆化によって生じた負の側面が曖昧である点などが指摘された。そこには受験という出口に向けた、簡潔な説明や構図が求められる「商品としての教科書」の側面が影響している。選ぶ側である教員自身が、良い教科書を選ぶ目を養う必要性を痛感した指摘であった。

緊急発言の鈴木報告では、「従軍慰安婦」や「強制連行」といった教科書の用語に政治権力が介入していることへの批判がなされた。教科書会社への「訂正申請」の圧力が問題として提示される中で、教科書への介入の動向を一層の警戒を持って見守っていく必要があるとの指摘がされていた。

木畑報告では、はじめに「歴史総合」の可能性について話があり、その後は主に「歴史総合」の3つの大項目を中心に、いくつかの問題点や論点が提示された。木畑氏は、世界史と日本史を融合させることや適切な資料を取捨選択すること、問いの適切な設定の難しさを述べていた。「歴史総合」は何年もの歳月をかけ、実践を積み重ねていく中でようやく1つの道筋が見えてくるものだと感じた。

最後に齋藤報告では、「歴史総合」と教員養成の課題が報告された。内容量の多さや資料の少なさ、また健常者史観に基づく歴史という「歴史総合」教科書の特徴や論点が提示された。特に教員養成の部分では、教員養成課程の中で「歴史総合」の位置づけに関わる問題点が指摘された。「歴史総合」を教える教員養成の視点で提示されたこの報告は、より一層考えていくべき問題である。

私は今回のシンポジウムに参加し、以下の点が重要だと考えた。初任者としての率直な意見である。

第1に私はインクルーシブ実践校に勤務しているため、依然、教科書が健常者史観にとどまっている点は特に問題だと感じた。民衆に根差した「小文字の歴史」も従来、取り扱いが少ない点で同様に重要である。優生思想という人類の負の側面や市井の人を扱う中で、資料を重視し、当時の人々の生活に寄り添えれば、生徒と歴史の距離が近づき、歴史で考え、思考を深める契機になるのではないか。

第2に教科書と政治の関係についてである。歴史教科書は政治に大きく影響・制限される可能性を孕んでいる。そのため学習指導要領の記載事項が、目指すべき歴史の姿なのか、疑問を持つことも大事ではないだろうか。教員自身が現状を疑い、研究や実践を積み重ねる必要性を強く感じた。

今後、様々な研究報告や実践例をもとに、自分なりの「歴史総合」を組み立てる必要がある。ただそこで私自身が歴史を好きだという気持ちを忘れずに、日々の実践を積み重ねていきたい。